

Title	内藤則邦著 イギリスの労働者階級；間宏著 イギリスの社会と労使関係
Sub Title	Norikuni Naito, British working class ; Hiroshi Hazama, British society and industrial relations
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1976
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.69, No.4 (1976. 4) ,p.218(88)- 221(91)
JaLC DOI	10.14991/001.19760401-0088
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19760401-0088">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19760401-0088</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 書 評

内藤 則邦 著

『イギリスの労働者階級』

間 宏 著

『イギリスの社会と労使関係』

(1)

英国のウィルソン首相は、去る3月16日、閣議の席上、労働党首としての地位を辞任したい旨の意向を発表した。これによって、イギリス労働党党首の選挙が行われ、3月末までには新しい党首が決まり、近いうちに総選挙が行われる予想が濃厚となった。この背景が何であるのかは明らかにされていないが、1974年のオイル・ショック以後の世界経済の大変動のなかで、国際収支の極度の悪化(1975年3月現在、22億ポンド)、大量失業(完全失業者1976年3月現在、130万人)、鉄鋼、自動車運搬などの輸出産業の不振、鉄鋼業における20,000人の解雇発表、最大の自動車メーカーのブリティッシュ・レイランドの経営危機、ブリティッシュ・クライスラーの争議、そして炭坑労働者の週100ポンドの賃金要求など、1975年から76年にかけてのイギリスの経済状態は、まさに戦後最悪の事態といわれ、とくに1974年から75年にかけてのインフレーションは猛烈をきわめ、筆者の滞英生活の体験では、物価上昇は35パーセントに達したほどである。

しかし今度のウィルソン首相の辞任は、こうした危機が背景にあることはもちろん想像できるが、しかしサンディ・タイムズによれば、経済的破綻ではなく、危機脱出のチャンスを見出したのを機会に見事な「ひきぎわ」を示したのだといわれる。サンディ・タイムズ、3月21日付社説によれば、「ウィルソン首相は、国民の感謝に値する理想的な辞任の時期を選んだ。いま英国に危機的状況はなく、労働党にも危機はない。その最適の時期選択の結果、労働党は十分冷静な状況下に後継者を選ぶことが可能となった。ウィルソン氏の勇退は、同氏をかねて権力の亡者と呼んできた人々を恥ずかしめるに十分な、見事なものである」(朝日新聞、3月24日、朝刊より引用)。

英国にも労働党にも危機がないというのは、よくわからないが、ともかく、イギリスという国は、「斜陽の国」とか「英国病」、あるいは「怠け者」などといわれながら、なかなか没落しそうにもない国であり、その点、日本が、「経済大国」、「GNP世界第2位」などといわれながら、どこか大切なところが、空洞化して、いつか大破局が来るのではないかと誰もが考えているのとは、まことに対照的である。

ここにとりあげた2冊は、イギリスという国、とりわけ、イギリス人の大多数をしめる労働者階級を知る上で、きわめて興味ある研究であるばかりでなく、われわれ日本人の物の考え方および行動の仕方と比較して、多くの考えさせる問題を秘めている。

内藤氏の研究は、著者がその序論「はじめに」のなかでのべておられるように、「現実のイギリス労使関係がエンクロードされ、そしてそれに束縛されざるをえないイギリス社会の精神構造における最も顕著な特質を明らかにすることを意図し……ローレンス、オーウェル、アラン・シトリーらの文学作品から多くの啓示をうけ、社会学を初めとする専門外領域の文献を多く利用し」(「はじめに」iii)で、まとめられたのにたいし、間氏の研究は、「比較社会的考察」というそのサブ・タイトルが示すように、「イギリスの社会と労使関係」を、「日本の社会と労使関係」との明白な比較の意図の下に試みられたものであって、とりわけ、企業にたいする労働者階級の態度についての分析は優れている。この点、内藤氏の著作が、その背後に、日本の労働者階級の精神構造を強く意識されながら、敢えてこれにふれることなく、そのために却って、本書を読み終った時点で読者に深く「日本の労働者階級」の精神構造について考えさせる結果となり、その手法は効果を発揮している。それはひとつには、間氏の著作は、著者自身が、みずから日本側の調査者として、岡本秀昭氏とともに参加した「日英労使関係の比較研究」グループ(英国側は、R・ドーア、K・E・サーレイ、R・M・V・コリック氏)の共同研究のひとつの成果であるのにたいし、内藤氏の著作は、労使関係というよりは、人間関係、階級構造の考察を、主として、文学的・社会的な文献を通じて追跡し、イギリスの労働運動や労使関係の基盤に存在する心理的・精神的な諸関係を追求しているからである。

以上のような差異にもかかわらず、この二つの業績に共通する問題関心は、「イギリス人およびイギリスの社会」を、人間学的あるいは社会学的に分析するこ

とによって、「日本人および日本の社会」を赤裸々にするにあつたのではなからうか。筆者はまず、問氏の著作を読み、つぎに内藤氏の書物に接したが、内容からいえば、内藤氏のを先に読むことによって、イギリスの労働者気質を知り、その上で、日英の労使関係の比較を中心に、問氏の労作を読むことがより効果的であると考えられる。

(2)

内藤氏の著作は、つぎの諸章から成る。

- 第1章 「福祉国家」の精神状況
- 第2章 'Two Nations'='2つの国民」の存在  
—ジョージ・オーウェルにそくして—
- 第3章 'Them' and 'Us'='やつら」と「俺たち」
- 第4章 《伝統的》労働者階級の生活構造
- 第5章 階級と教育
- 第6章 「教育と労働者階級」—グラマー・スクール、高等教育—
- 第7章 いわゆる「変化」について—「豊かな労働者」=The Affluent Worker—

むすび

内藤氏の著作は、一貫して、イギリス労働者気質の根底に横たわって、彼らの日常生活を支える心理的・精神的な構造に光をあてようとする。すなわち、この目次からも明らかなように、まず第1に労働者階級以外の他の階級、たとえば中産階級にたいする態度、第2に彼らの生活の仕方、そして第3に教育および労働観というように、大きくわけて3つの問題に帰せられると私は思う。

かつて、日本の新聞か雑誌に、「あなたの生活は、上、中そして下のいずれに属していると思いますか」という問にたいするアンケートの答にたいして、「中」と答えた者が圧倒的に多かったということを読んだことがある。この場合、「中」とは、生活程度における「中」であるが、同時に、自分が「中等階級」に属しているという考え方と表裏一体をなしていることが重要である。日本の場合、階級というカテゴリーが、職業と密接に結びついて考えられないことが特徴的である。職業とは、人がその生計をたてるために行う労働の種類と仕方にかかわるものである。大きくわけて、職業としての労働は、肉体労働と精神労働にわけられ、前者が筋肉労働者(=ブルー・カラー)、後者が知的労働従事者(=ホワイト・カラー)である。そして一般に後者が、

中間階級、中産階級、ないし中等階級あるいは中流階級などと呼ばれるのであるが、内藤氏の著作を読むことによって、われわれは、「階級」という概念のうけとめ方が、イギリスの労働者ははるかに伝統的できびしいのに反し、日本の労働者の場合は、きわめて曖昧であり、階級帰属意識がきわめて弱いことが理解されよう。

たとえば、内藤氏は、George Orwell を引用して、「『上層中流階級の下』は、ほとんど労働者階級と差のない収入で、『上品ぶった生活をおくるために苦勞』しなければならぬ人びとである」(27頁)が、よく考えないとこの意味をわれわれは、理解することができない。

これは、中流階級には、上層と下層があり、そのそれぞれにまた上下があることを意味しているのであって、こうしたことをわれわれの国では考えることはできない。事実、英語では、upper middle-class と lower middle-class という2つの概念が存在するのにはおどろかされる。それがさらにわかれて、upper higher middle-class と upper lower middle-class となったのは、熟練労働者や下級事務員の一部分が、この中流階級に近い存在になった最近の現象であると思われる。日本でこんなことが考えられるであろうか。こうしたmiddle-classにたいする労働者階級の感情について、内藤氏は、Gordon Rose や Richard Hoggart の 'Them' and 'Us' から、この 'Them' とは、「彼ら」と訳すべきではなく、「やつら」でなければならぬとしているのは興味深い。この場合、「やつら」とは、Rose によれば、「産業、政治および行政の機構のなかで人の運命をコントロールすべての人びとにたいする包括的名称」であり、Hoggart は、民間の個人であれ、役所の役人であれ、「ボスどもの世界」であるという(40頁)。

しかしの場合、複雑なのは、「やつらと俺たち」のもつ意味である。これは、自分たちの運命を握っている下層中産階級=下級事務員ないしは管理者にたいする憎しみの表現であると同時に、労働者階級の中流階級全体からの区別、すなわち、自分たちは労働者階級であり、中産階級とはちがうのだという認識、自分たちが、その一員となることは到底できないし、またなろうとも思わないという感情、これらが奇妙に入り混った表現ではなかったろうか。「やつら」と「俺たち」という表現は、たしかに、内藤氏がいわれるように、自分たちの運命を自由にする「やつら」とにたいする怨恨および憎悪の感情だけでなく、中産階級との間の断

絶、その距離の遠さを確認する響きを秘めてはいないであろうか。これは根本的には、自己と他人との違い、個の確立の上に立った他からの独立、independence, self-respect, self-relianceの精神、こうした個人主義の基柢をなすエートスの存在こそ、イギリス労働者階級の特徴ではないだろうか。この強烈な自我意識こそ、わが日本の労働者階級にもっとも欠けているところのものである。

内藤氏は、労働者階級の子弟のグラマー・スクール進学にたいする態度も、「単に消極的というよりも、「拒絶反応」を示す場合すら発見できる」(54頁)としている。内藤氏は、'Them' and 'Us'における「俺たち」のもつ連帯の意味を強調しておられる。勿論これは誤ってはいない。しかしその根底には、「奴ら」を階級の敵対的として把握する前に、やはり「彼ら」として、冷静に、まさしく個人主義的にうけとめ、自己を客観視し、中流階級との差異を強調する「自我」意識があるのではなからうか。

(3)

間氏の著作は、

序章 工場内労使関係の比較社会学

第1章 階級と工場内労使関係

第2章 個人主義と工場内労使関係

第3章 アソシエーション性と工場内労使関係

の3章から成っている。内藤氏の著作は、著者が「あとがき」で謙遜してのべておられるように、真正面から、労使関係を追求するものではないのにたいし、本書は、まさに、工場内労使関係を通じてみた使用者と労働者、企業と労働組合、組合と労働者、労働者と職制、そして労働者と労働者との関係の追求を意図している。

本書においても、「やつら」と「俺たち」の階級に関する二分的表現の重要性が強調されている(32頁)。だが、著者は、イギリスの場合、階級について2つの用法を指摘し、第1の用法は、階級を身分と同じ用法で用い、上流、中流と下層という階級的区分であり、第2の用法は「支配階級」と「労働者階級」というわけ方としての「やつら」と「俺たち」があるというのである(32頁)。その意味では、著者はイギリスにおいては階級意識とを身分意識とはほぼ同一のものとして、重なり合うものと考えているわけである。

私はここで興味深い事実を著者からきくことができ

た。日本では、身分意識はきわめて強烈であるが、階級意識は非常に稀薄であることである。「面接調査において、イギリスの大工場の労働者の多く(63.4%)は、自らを労働者階級に位置づけているが、日本の大工場労働者の多く(46.4%)は、むしろ中流階級に位置づけている。もっともイギリスの場合も、4分の1近くが中流階級と回答しているといわれるが」(61~62頁)。内藤氏の場合と同じく、本書においても、労働者の階級帰属意識の問題がもっとも重要な問題とされているように思われる。

さきにもべたように、私は、これらの2つの著作を通じて、労働者の間に、「Them' and 'Us」「やつら」と「おれたち」の自覚がいかに強烈なものであるかを知ったが、間氏の場合も、内藤氏と同じくこの階級関係の二分的表現を、ただ「支配と被支配」の関係しかみていないような気がする。しかし私はここでも、「おれたち」は「やつら」、あるいは彼らとは違う。彼らは彼ら、「おれたちはおれたち」という近代的自我につながるエートスを見出すのである。いうまでもなく、「やつ」と「おれ」ではなく、「やつら」と「おれたち」であるところに団結と連帯のエスプリを感じるが、何といっても、その前に、個の十分な確立ののちに、その上にうちたてられた階級的自覚を通じて、支配と被支配にたいする深い認識に到達できるのだと思う。そしてその点こそまた、日本の労働者に欠けたものであり、その結果は、生活のあり方にまでかかわってくる。

内藤氏の著作にもしばしば言及されているが、間氏は、「職場集団のコミュニティ性」の問題にふれ、「職長と部下とが、日本の職場でしばしばみられるように、互いに仲間意識を持つことは不可能に近い」(211頁)とのべておられる。このような態度は、「生活における個人主義」としてあらわれ、従って、日本の企業によくみるように、労働者をその家族から切り離して行く慰安旅行は、イギリスでは考えにくく、「従業員個人を対象にした福祉施策でも、必然的にその家族までふくまれてしまう」(214頁)ことになる。

2つの豊かな内容をもつ書物についての論評としては、まことに短いもので充分に意をつくせないのが残念であるが、最後に、結論的に、再び「やつら」と「おれたち」の問題について考えてみよう。

筆者は'Them' and 'Us'の'Them'を、「彼ら」ではなく、「やつら」と訳された内藤氏の意見(38頁)にもちろん賛成である。これは、間氏もいうように、中流階級と労働者階級との対立を意味する支配と被支配の感

情だけでなく、職場における職制にたいする労働者集団の連帯を強く感じさせる言葉である。だが、それにもかかわらず、筆者は労働者階級の中産階級との深い断絶を意識させる表現として、そうした階級的支配と被支配の感情の根底にあると思う。それはやがて「やつら」か「おれたち」か、に発展する契機をひそませており、自己の属する階級と他の階級との相違の意識、これこそが、日本の労働者にもっとも強く欠けている点ではなからうか。

'Them' and 'Us' を意識しない日本の労働者は、どのような顔負けが自己の企業を蔽おうとも固い沈黙を守り、わがことのように、企業の利益を守ろうとする。イギリスの労働者階級や労使関係だけでなく、こうした企業別労働組合のもつ弱点を知るために、この二つの研究は必読の書であり、一読をすすめたい。

飯田 鼎 (経済学部教授)

ジョン・シュレベッカー著

『アメリカ農業史』

デイヴィッド・スコープ著

『アメリカ中西部の農業労働者』

ここに紹介する二冊の本は、いずれも、アメリカ農業史研究者にとって待望の書であった。待望の書という意味は、かかる書物の必要性を誰もが感じていたにもかかわらず、これまで類書が存在しなかったからである。期待が大きかっただけに、読み終ったの正直な感想として、いささか不満が残る。しかし、これは著者の力量の不足からくるものというよりは、彼等の課題の困難さを示すものというべきであらう。

シュレベッカーの書物は、1607年(ジェイムズタウン植民地の建設)から1972年にいたるまでの、アメリカ農業史の通史である。これまで存在する概説書は、ビドウェルおよびファルコナーの『北部農業史』、グレイの『南部農業史』をはじめとして、ゲイツの『農民の時代』やシャノンの『農民の最後のフロンティア』など、極めて質の高いものではあるが、その対象とする地域や時代が限られていた。また、ラースムッセンの『アメリカ農業の歴史』は、資料集であって通史ではない。いわば唯一の通史は、1940年の農務省年報にのせられているエドワードの『アメリカ農業——最初の300年』ということになるが、その後の研究の進展を考えると、今日では少々物足りない。それ故、先に優れた文献目録 (*Bibliography of Books and Pamphlets on the History of Agriculture in the United States, 1607-1967*) を出版したシュレベッカーの本書が待たれていたわけである。

一方、スコープの書物は、1815年から1860年にいたる時期の、中西部の農業労働者を扱ったものであって、シュレベッカーのそれとは対照的な個別研究である。しかし、類似の研究書がないという点では、これも同様に貴重な書物である。南部の黒人奴隷については多くの研究がなされているが、北部の農業労働者に関しては、不思議に研究がない。もちろん、農業労働者が存在したことは前記ゲイツの書物をはじめ、ダンホフの『北部農業史』や、ポウグの『中西部農業史』にも記されているのであるが、その実態は全く不明であったといつてよい。これは、北部農業が独立農民もしくは家族農場を中心に営まれていたという事情(ないしは神話)に加えて、労働者に関する史料が極めて限ら